

東京女子医科大学看護学会第 12 回学術集会 シンポジウム
「私たちの看護の原点とこれからの挑戦」

自分の看護の原点とこれからの脳神経看護について考える

佐藤 由紀子

(東京女子医科大学病院 社会支援部 がん看護専門看護師)

自分の看護の原点は、看護学生時代の実習体験と新人時代にあると思っている。実習では脳血管障害の患者の四肢麻痺の回復や障害受容の過程などを通して脳の回復の可能性や人間の生きる力を目の当たりにし、全てのことにただひたすら感動していた。新人の時は、先輩方からフィジカルアセスメントについて丁寧に指導を受けた。看護師の行動や声かけには全て深い意味が存在していることに圧倒され、先輩方に迷惑をかけずに早く一人前になりたいと考えていた。一人前 (Competent) の時期になると、脳腫瘍の終末期の患者を担当し、寄り添う家族の心理的支援に難渋し、退院困難な患者の外出・外泊支援をするなど看護の幅が広がってきた。忙しく日々挑戦する一方で、仕事をいかに早く安全に効率的に終わらせるかということに傾いている自分に「異和感」を感じた時期でもあった。今思えば自問自答していた時期だった。看護学生が実習に来ると、成長した自分に気づく反面、学生時代の感動しきりであった自分を忘れた寂しさがあった。そして自分の看護が何のエビデンスに基づいて行われているものなのか省察する機会となった。

看護師 6 年目の時に文学部に入学し、現象学をはじめとした哲学や、宗教、倫理などを学んだ。今までの自分は患者を看護の観察項目という「眼鏡」で見て、正常か異常かで判断していたことに気づいた。そして世の中には様々なものの見方があり、意識すればその「眼鏡」は付け替えが可能であり、自由に見方を変えられることを学んだ。一方、患者に起こっている現象を先入観無しにありのままとらえてみることも大事であることも学んだ。現象には必ず意味があり、現象について看護理論や専門知識を応用し分析することでより患者の理解が深まり、適切なケアにつながるということが分かった。大学での学びは自分の意識が変わることで世界が変わることを教えてくれた。

看護師 10 年目の時に脳神経領域以外の看護も経験することでより一層看護の意味を考えるようになり、研究的な思考や方法論を学ぶため大学院に進学した。2011 年にがん看護専門看護師の認定を受けたが、専門領域はグリオーマとし、あえて自分の看護の原点である脳神経看護に拠って実践していきたいと思った。現在は社会支援部で退院調整看護師をしながら、グリオーマの看護相談を行っている。術後の高次脳機能障害の相談や関わる家族の相談、再発を繰り返しても治療を継続する患者の療養生活の相談、心の相談など相談内容は多岐に渡り、今更に脳神経看護の奥深さを感じている。

自分が臨床の専門看護師として今ここにいられるのは、グリオーマの看護研究を行う環境があるからであると常に感じる。今後看護教育や臨床研究などを通して大学と病院の架け橋となり、より一層臨床で看護師が仕事として看護研究が行われる風土が作られていくことが今後の夢である。